

白光
びやうくわう

富岡多恵子

新潮社

白光

Shirô

新潮社

白^{びやう}
光^{こう}

一九八八年一月二〇日 発行
一九八八年二月一五日 二刷

著 者 富岡多恵子^{とみおかたえこ}

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部） 03—二六六—五一—

（編集部） 03—二六六—五四—

振替東京四—八〇八

印刷 錦明印刷株式会社

製本 大口製本株式会社

定価 一一〇〇円



© Taeko Tomioka.
1988. Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-315004-1 C0093

白

び
や
っ
こ
う

光

広いベランダから傾斜する雑木林の下に、川とは呼べない水の流れがあった。それを、おおげさに「川」とことあるごとにいい、なんとその「川」に子供が流れてきて、それをひろって育てたのが、息子の山比古だとタマキは自慢するのだ。わたしも子供のころまわりの大人たちから「お前は四ツ辻からひろってきた子だ」とよくからかわれた。それは、一度四ツ辻にすててから、すぐにひろってくと丈夫になるというマジナイのためだったらしいのだが、子供にはそんなことがわからないので、「深く傷ついて」しまふのだった。

タマキがわたしを誘ったのは、山比古を見せたためだとわかつていた。山比古が、ほんとの息子でないのを、わたしは知っている。かといって、山比古が、川に流れてきたなんていうタマキの冗談はさすがに信じていない。ただ、わたしがはじめてかれらの棲家を訪ねる気になったのは、タマキの息子がもうすでに二十二歳だと知ったからだ。そのうえ、も

うひとり十七、八歳の男の子が手伝いにきているのだというのだ。わたしは子供のいる家を訪ねるのは好きではないのだが、子供が二十二といえは事情がちがう。子供が小さいとどうしてもかれらが話題の中心になり、大人同士で話がしにくい。

タマキの家は、紙きれに書かれた地図を見せるまでもなく、タクシーの運転手が知っていたのは、やはりタマキたちがヨソモノで、そこでは変わった暮らし方なのであろう。近くに目印になるものはなにもない国道の真ん中でタクシーがとまり、さてどうしようと思つて、しばらくぼんやりとたたずんでいた。国道の片側は一面の畑で、片側は杉林である。タマキは杉林からあらわれたのだった。

杉林のとぎれたところから、狭い、けもの道のような、あやふやな坂をゆるゆると下つていくと、急に視界がひろがつて、向こう側にゆるい丘がのびている。「川」は丘の手前にガラスのかげらのように、ところどころ光つて見えた。家はその手前にあつた。

「何年ぶりかしらねえ」とタマキはわたしの顔を正面から見つめて、テレもしないでいった。わたしはタマキの開けてくれた窓からずつと外を見ていたのである。

「もう忘れたわねえ、いつだったか——」というタマキの顔をわたしは改めて見る。わたしもタマキからそのように見えているのかもしれないが、すでに中年の顔ではなく、あきらかに老年にさしかかった弛緩ゆるみがそこにある。小皺があるとか、白髪があるとか、そういうこと

ではなくて、顔の全体がバラバラにゆがんでいるのだ。わたしも時々、自分のこめかみを両方の人指し指で上につりあげてみて、表情が若々しく見えて驚くことがある。だけれが、年をとると引力の法則で肉が下にたれさがると笑っていたが、顔の肉もそれぞれの部分でたれさがってくるのだ。

「よく、こういう田舎に住むと、こんな花が咲くとか、こんな鳥がくるとかいつて、自慢するひとがいるでしょう。雑草の名前なんて急に覚えたりして。ママコノシリヌグイなんていわれたって、おもしろい名前だとは思うけど、知らないからホーなんていうしかないんだもの。花や鳥の名前をやたらに知りたがるっていうの、なんでしょうね」

「わたしはそんなこと知らないから安心していいよ」とタマキは笑う。

「若い衆たちは？」

「仕事よ」とタマキはぶっきらぼうだ。

家の建て方も、家具も、家のまわりの景色も、とくになにも変わったところはないのだが、わたしにはここがいつもとはちがう場所に思えるのである。タクシーで降りた、あの国道の、あの場所から、いつもとはちがうのである。いったいなにがちがうのだろう。

タマキはあの時まだ二十代だった。二十五にはなっていたか。一年後には結婚して、夫の勤め先の都合で地方の都市に住むようになった。そのころから往き来はなくなった。一度、

まだ幼い子をふたり乳母車に乗せた写真を送ってくれたことがあったが、あの子らはどうしたのか。だいたい、タマキが団地に住んで乳母車を押して歩いているなんておかしいことではないか。カタギさんの団地妻になるなんて聞いてあきれるよ、といたいところだった。

「相変わらず、おしゃれが下手くそねえ。髪をもう少しなんとかすれば、可愛いんじゃない？」

「変なこといわないで。ここへ来る時に見たでしょう。近くに美容院なんてなかったでしょう？」というタマキの髪は肩のあたりでぶつ切りのままだ。しかも自分で切ったのか、ギザギザになっている。

「好きなようにしているんだから、なにかも」とタマキはいう。

好きなように、ああそうか、好きなようにか。ここはそういう場所だったのか。

タマキはあのころも好きなようにしていたのではなかったか。親元から離れてひとりで暮らして、ひとりで稼いで、好きなようにしていたではないか。そうだ、あの男もうまい具合にいつのまにか遠ざけて。あの男、外国へ行って「西洋人」と結婚し、子供をつれて日本に帰ってきたというではないか。それにしてもタマキが、一度はあの男にいれあげたというのもおかしなことだ。あの男は狂気じみたふりをしてはいたが、それは頭が悪いせいだった。

頭が悪いから、単純にも、天才は狂気じみるものだと思ひて、ちょっと天才ぶっていただけだった。

鼻にかかったような声、焦点の合わない目つき、小さくて、ぼつてりとした唇。なにも変わっていないじゃないか。あの頃は、タマキに逢いたくて、ドアを押してタマキが入ってくると、靴をぬぐのもどかしく、わたしはタマキを抱きしめた。

『川』上の方に小さな村があつてね、村といつても十二、三軒しか家はないんだけど、

『川』に流れてくる赤ん坊はその子なのよ』とタマキはしらしらした顔でいう。

「せつかく遠いところからきたのに、お水一杯くれないんだからね」

「ああそうだ」

「水道はきてるんでしょ」

「ひどい、いくらなんでも」といつて、タマキは部屋を出ていく。

わたしはペランダから、そこにあつた男物らしいゴム長をはいて、雑木林から「川」の方へいく。途中にゴミを燃やすための、大きな穴があり、無造作に紙くずが投げこんであつた。ペランダを振りかえると、タマキはわたしを見ていた。

傾斜する地面を降りきつてしまうと、家の屋根は見えるけれど、もうタマキの姿は見えない。タマキのいう「川」は、沢水といった方がよく、膝を濡らすのをいとわなければ、向こ

う側へ簡単に渡れる。ここに流れてきた赤児が山比古だというのなら、山比古は「川」上の子だということなのか。タマキはそういうことをいいたかったのか。それにしても、いや、もしそうであつたとしても、それはずいぶん昔のことであろう。山比古はすでに二十二だというのだから。といつても、二十二年前ということではないだろう。

「ここにね、黄金の瓜が流れてきたのよ」とうしろにタマキがいた。

「反対になつたわね、昔はわたしの方がおかしいことをいうつて、いつもあんたが怒つたのに。川に子供が流れてくるなんてヘンなことというんだからね」

「子供じゃなくて、黄金の瓜だつていつてるじゃないの」

「その方が、よけいにヘンじゃないの。きつと、その瓜から赤ん坊が出てきたつていうんでしょ」

「それなら瓜子姫になつてしまふ。山比古は男の子ですからね」

「なにが自慢の息子かねえ。よくいうよ、川に流れてきただの、黄金の瓜だのつて。だいたタマキが流れてきた子を育てるなんて、そんなことありえないじゃないのよ」

「育てたんだから、ほんとに。小学校の時からいるんだからね。あたしは山比古の母親ですからね」と氣持よさそうにタマキは笑っている。

「『上の村』から、手伝いを頼んでね、先月から」とタマキは家の横手をまわつて、薪小屋

の方へわたしをつれていく。

「それが黄金^{きん}の瓜^{うり}っていいたいんでしょ？」とわたしが笑うと、「その話はまたあとでする」とタマキはいかにもこの土地の者らしく、折れた枝をひろいながら歩いていくのである。冬のためだろう、ストーヴのそばには不揃いの柴が積んであったが、あれはこうしてひろい集めたものなのかも知れない。

薪小屋の方にのぼっていくと、家からとは反対の景色が見える。小高くなった向かい側は、「川」の向こう岸になるのだろう。しかし、そこは一面こちら側とまったく異なった色をしている。樹木はみどりではなく、明るいインキのようなブルーで、地面も紺色である。

下から男がふたりのぼってくる。タマキがふたりにわたしの名をいう。男はふたりとも黙ったままで顎をつきだすようにして会釈する。タマキがなにか命じていた方の、黒いＴシャツを着ていたのが、山比古だろう。あとで山比古は、タマキはひとに山比古という名前をいうのをいやがるというのであった。まるで、山比古という名前を声に出して呼ぶと、なにか悪いことが起るとでもいうようだというのだ。しかしわたしには、わざとらしく、何度も山比古と聞かせたではないか。それに、こんなことまでいったのだ——あのね島子さん、あたしの母の田舎じゃ、ヤマビコのことをね、アマンジャクっていうのよ、おかしいと思わない？ それであたし、あの子が流れてきた時すぐにそのこと思い出して、山比古ってつけた

のよ。それで山比古さんはタマキのことをなんて呼ぶの？ とわたしは山比古にたずねる。それはその時その時でいろいろですよ、というのだった。ママなんて呼ぶんじゃないでしょうね。それとも、なに、タマキっていうのかな。すると山比古は怒ったのかなにもいわなくなった。その山比古に、ヤマビコじゃなく、ヤマヒコだよねえ、とわたしはからむのだ。アマンジャクじゃないわよ、ヤマビコは山の男の子ってことでしょ、あなたは山の子で海の子ではないのよね、そうじゃない？ 山の子で、山の精だから、山から響いてくる声をそう呼ぶんじゃない？ タマキはそういうつもりだったんじゃないの？ ねえ山比古さん、とわたしはひとりひとりで喋っているのだ。あんたは山の精なんだ、そうだよ、山比古さん、とわたしはひとり合点に酔っている。ここへくるまで、こんなことは考えもしなかったのだから、自分の思いがけない納得が、数学の問題があっさり解けたようにうれしい。しかしタマキがこんなことを考えていたかどうか。

山比古が、手伝いにきているという年少の男の背中を押しだしながら、「ヒロシ」とわたしに名を教えた。多分、教えたつもりだっただろう。とにかくわたしにはヒロシという音が聞えたのだった。ふたりはほぼ同じ背丈で、今の男の子ならフツの一七五センチくらいに見える。

「ヒロシ、おれんとこに泊めてやるから」と山比古がおそらくタマキにいつている。しかし

タマキは返事しない。

「ヤマ、おれ帰るからよう」とヒロシがいう。「泊れっていつてるだろう」と山比古がふわふわした声を遠くに広げるようにあげる。

「ヒロは帰るところもないくせにさあ」とタマキは笑いだしそんな声でいうのだ。「それが毎日こうだから、おかしいったらないんだよ」とタマキは今度はわたしにいう。

「友達だからよ、おれたちは。ヒロのところにいけば、おれがヒロのうちに泊るしなあ」という山比古の声をはらいのけるように、「友達だからよ、おれたちは、だつてさ。よくいつてくれるよねえ。島子さん、どう思う？ 男がよ、ぼくたちお友だち、なあんていうんだから。友だちと恋人をしつかり区分けしてるつもりなんだから。でもこのふたりはね——」とタマキは笑っているのだ。

「ビール買ってきましようか」とヒロシがいうと、「手伝いの奴隷がなにをいうか」とタマキがまた笑う。

ベランダにいくつも放りだされている座蒲団やクッションを好きなだけひとりじめして、寝ころんで空をみる。

「島子さん、ここへきて遠慮しちゃダメよ。好きなようにしてんだから、みんな」とタマキは景色をぶっこわすような大声をわざとあげる。その声に顔を向けると、タマキの足の裏

をヒロシが指圧している。山比古は向こうに顔をむけて寝ころんでいるのだが、横たわった胴体が揺れうごく丘のように見える。「遠慮しないでよ」とまたタマキがわたしにいう。いったい、遠慮しないでなにをすればいいのか。

ベランダにテーブルはなく、大皿がじかにおかれている。屋根瓦よりも大きく、無造作な感じにこしらえた、やきしめの大皿二枚、こまかい模様の染めつけの大きな深鉢のそれぞれに、焼いた魚と刺身、それに青菜がもりつけてある。いつ、だれが、魚をさばいたのか。

タマキのかたわらには、山比古とヒロシがかならずいる。わたしはタマキを独占したいのだ。いきなりだしたい。わたしのそばにひきずってきたい。わたしはタマキを独占したいのだ。いつもわたしは、人間をひとりだけ独占しようとして、それができないことを知るたびに、ひとのいない方へと隠れていくのだった。子供の時から、いやもつともつと幼い時からずっとそうだった――。

タマキがふたりの男をつれている。それがわたしには、タマキが全宇宙を味方にし、自分がまったくのひとりで宇宙の果てに置き去りにされているように思えるのだ。わたしはひとりで、宇宙の果てのベランダの隅に坐っている。

かれらの目下の関心は、「下にできた」というペンションであるらしく、その建物、内装、オーナー等について勝手な批評をしては楽しんでる。どうやら、オーナーというのが、定

年退職したサラリーマンで、退職金を元手に開業したようである。そして、建物はカナダとかから輸入したログハウス式のしゃれたものらしい。

「なんていうの？ そのペンションの名前は」とわたしはあまりかれらと離れてはならないと、気をとりなおして尋ねる。

「それがね、旭日荘っていうの。なにか思いださない？ 昔さあ、ジョーン・バエズってフォークの歌手がいたでしょう。島子さん、レコードもってたじゃないの、出たばかりだとかいつてたじゃない？ あそこにてきた売春宿の名前が日本語にすれば旭日荘だなんていったことあったでしょ？」とタマキがだるそうに、間のびした声で喋っている。

タマキとわたしには未来はないのだろうか。なにもかもが昔につながっていくのだ。ただかたか二十年くらい前のことを、ムカシムカシといわねばならないなんて。そうだよ、たしかに、ジョーン・バエズがまだ日本で流行りだすひと足先にそのレコードを偶然にアメリカで買ってきたひとにもらって、聞いてびっくりの大感動だったんだ。それでタマキにレコードを貸してあげたんだったね。ああ、なんていう歌だった、あれは。節はおぼえているのに、タイトルがでてこないよ。おぼえているよ、旭日荘——。あたしがいったんじゃないか、これは、日本語でなら旭日荘ってところねって。フォークか。みながフォークフォークっていうから、なんだナイフじゃないのか、なんて笑ったよね。なんでも笑った、訳もなく。泣け

るよ、なんていつてながら笑えるんだもんね。

「なんてタイトルだったっけ、あの歌」「いいわよもう、めんどうだ、思い出すなんて」「思い出す努力をしないと、どんどん忘れちゃうよ」「どんどん忘れましようよ」「相変わらずね、島子さん」いやだよ、思い出してばかりいるなんて。

「昨日いたの、あれ奥さんかなあ」とヒロシが山比古と喋っている。また旭日荘の話らしい。「馬鹿、お前、あれはあのオーナーの娘にきまつてるじゃないか」「もう三十か四十ぐらいだぜ」「三十か四十というのは、ちょっと幅がありすぎるよ、ヒロシ」「二十代じゃないとは思ったんだけどな」

「ヒロシ、島子さんに指圧してやんなよ」とタマキはぞんざいな口調でいう。「ヒロシはうまいのよ、指圧が。なかなか本格的だよ。どこで習ったんだか知らないけどさあ」とタマキがいうと、「ヤマの方がうまいよ」とヒロシがだるそうにいう。するとタマキが、「山比古は下手だ。ただ力をいれればいいと思ってるんだから」とささげる。「指圧の話なんだよ、これは」と山比古が笑い、わたしの足首をつかんだ。

「なんだか、老人扱いだわね、これじゃあ」とわたしはテレ笑いしているが、山比古がわたしに近づいたことがうれしい。わたしははじめて山比古の顔をはっきり見た。もちろん、タマキとは似ていない。目は少し細いが、道具だてのおおまかな顔だ。舞台ばえのする顔かも